



本ガイドブックは、独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて製作したものです。

石川県ユネスコ協会 北陸 ESD 推進コンソーシアム

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGs・ESD 実践ガイドブック

北 陸 版



は じ め に

2017 年 3 月、2018 年 3 月に行われた学習指導要領の改訂により、今後の初等中等教育において「持続可能な社会の創り手となることができる」人材の育成が求められることが明確化されました。この改訂を踏まえ、2020 年 4 月からの小学校での全面施行に向けて作成された教科書では、2015 年に国連で採択された世界の目標である「持続可能な開発目標（SDGs）」やそのための人づくりを担う「持続可能な開発のための教育（ESD）」について記載されています。

北陸地域では、ESD については 2007 年度から様々な取り組みが進められてきました。たくさんの研修会が開かれ、多くのモデル事業が展開された結果、北陸のユネスコスクールは 100 を超える、全国でも有数の規模になっています。北陸地域での ESD を推進するため、ユネスコスクールをはじめとする学校、教育委員会、大学等高等教育機関、博物館や動物園等の専門知識を有する機関、地域のユネスコ協会、NPO・NGO など多くのステークホルダーにより構成される北陸 ESD 推進コンソーシアムも 2016 年に立ち上げられました。

しかしながら、SDGs に関する理解、SDGs と ESD の関係等については、必ずしも多くの学校の教員たちが熟知している状況にはありません。改訂学習指導要領の全面施行をひかえ、学校教員を中心としたステークホルダーが SDGs や ESD について教える際の具体的、実務的な参考となるよう本書（北陸版 SDGs・ESD 実践ガイドブック）は作成されました。第 1 章で SDGs の基本的な考え方や SDGs と ESD の関係について、第 2 章で SDGs を推進するために ESD を通じて行うべき事項について、第 3 章で SDGs・ESD の実践事例についてまとめています。

本書は、これから学校での実践を通してでてくる疑問、課題や優良実践事例等を踏まえ、来年度以降さらに改善していきたいと考えています。

本書が北陸において SDGs、ESD を進める皆様、特に学校教員の方々のお役に立つことを祈念いたします。

令和 2 年 2 月

北陸 ESD 推進コンソーシアム
プロジェクト・アドバイザー
鈴木克徳

目 次

はじめに

目次

第1章 SDGs の推進

1	2030 アジェンダと SDGs	2
2	SDGs がめざすもの	3
3	日本の SDGs への取り組み	4
4	SDGs と ESD の関係	5

第2章 ESD の更なる推進

5	ESD とは？	6
6	ESD で目指すこと	7
7	ESD の歩み	8
8	ESD の推進体制	9
9	留意すべき事項	12
10	カリキュラム・マネジメント	15
11	ESD・SDGs と学習評価	18

第3章 SDGs・ESD の実践事例

12	勝山市立勝山中部中学校ーSDGsを切り口にした授業実践ー	22
13	金沢市立兼六小学校ー名古屋市立荒子小学校との交流活動ー	24
14	高岡市立成美小学校ー共に生きるー	26
15	金沢市 金沢SDGsー想像してみよう金沢のミライ IMAGINEKANAZAWA2030ー	27
16	富山県南砺市ー「一流の田舎」の実現へー	28
17	富山市ー持続可能な未来を創造するESDの取り組みー	30
18	石川県ユネスコ協会ー石川県ユネスコ協会青年部の取り組みー	31

参考資料



第1章 SDGs の推進

1 2030 アジェンダと SDGs

今、われわれが生きている現代社会は、世界的にも国内的にも、気候変動（地球温暖化）や生物多様性の損失（環境の課題）、紛争や人権侵害（社会の課題）、貧困や経済的格差（経済の課題）など様々な課題が溢れています。こういった諸課題はそれぞれ独立したものではなく相互に関係し、多くの場合、ある課題を解決しようとするにより別の課題の深刻化を招くといったトレードオフが存在しますが、それを乗り越え、持続可能な社会を実現していかなければ人類の未来はありません。

そこで、2015 年 9 月の国連総会では、世界の諸課題を解決に導き、より良い未来を目指すための道筋を示した、「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が国際連合参加国・地域の全会一致で採択され、そのアジェンダ中に「持続可能な開発目標（SDGs）」が掲げられました。SDGs は、2016 年から 2030 年までの間に発展途上国から先進国まですべての国がめざす世界共通の目標で、環境・社会・経済の 3 つの側面のバランスが取れた持続可能な世界を実現するための 17 のゴール（目標）とそれぞれのゴールの下にある、より具体的な 169 項目のターゲット（達成基準）で構成されています。



SDGs の 17 の目標のロゴマーク

〔出典：国際連合広報センター〕

2 SDGs がめざすもの

SDGs の 17 の目標がめざす内容を下表にとりまとめましたが、これらの目標を実現していく方法としては、フォアキャストとバックキャストの考え方があります。フォアキャストは、現在取り組んでいる活動を SDGs に関連付けることにより新たな意義や価値を見出し、取り組みを改善していく方法であり、バックキャストは、将来的に SDGs が達成された理想像を構想し、そこから逆算して現在の取り組みを考える方法のことです。

この 2 つの方法はどちらか一方が優れているとかいうものではなく、上手に組み合わせることが重要ですが、SDGs は人類の未来をかけたチャレンジであるため、バックキャストの考え方抜きには SDGs の推進はできません。

SDGs の 17 の目標がめざすもの

目標1	あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる
目標2	飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する
目標3	あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する
目標4	すべての人々への包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する
目標5	ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う
目標6	すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する
目標7	すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する
目標8	包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用を促進する
目標9	強靱 レジリエントなインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る
目標10	各国内及び各国間の不平等を是正する
目標11	包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する
目標12	持続可能な生産消費形態を確保する
目標13	気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる
目標14	持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する
目標15	陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する
目標16	持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する
目標17	持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する



3 日本の SDGs への取り組み

SDGs はすべての主体が関わる普遍的な目標であることから、日本でも 2016 年 5 月、SDGs を総合的かつ効果的に推進するため、全国務大臣を構成員とする『持続可能な開発目標（SDGs）推進本部』（本部長：内閣総理大臣）が設置され、同年 12 月に『SDGs 実施指針』が策定されました。指針では、「あらゆる人々の活躍」「成長市場の創出、地域活性化、科学技術イノベーション」「省エネ・再エネ、気候変動対策、循環型社会」「生物多様性、森林、海洋等の環境の保全」など 8 つの優先課題が示されました。また、2017 年 12 月以降毎年、『SDGs アクションプラン』を決定・公表しています。2019 年 12 月に決定・公表された『SDGs アクションプラン 2020 ～ 2030 年の目標達成に向けた「行動の 10 年」の始まり～』では、国内実施・国際協力の両面において、次の 3 項目を政策の 3 本柱として「日本の SDGs モデル」の展開を加速化していくこととしています。

1. SDGs と連動する「Society 5.0」の推進
2. SDGs を原動力とした地方創生、強靱かつ環境に優しい魅力的なまちづくり
3. SDGs の担い手である次世代・女性のエンパワーメント

これら 3 本柱のうち、特に ESD に関係が深いのは 3. ですが、次項目で SDGs と ESD の関係について詳しく解説します。

4 SDGs と ESD の関係

「教育」は SDGs の目標 4 に位置付けられ、さらにターゲット 4.7 に、「持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能の習得に向けて取り組むこと」すなわち、ESD の推進が位置付けられています。また、日本政府の『SDGs 実施指針』には、優先課題のひとつとして「国内外における SDGs の達成を担う人材育成の強化」があげられ、具体的には次のように位置づけられています。

新学習指導要領を踏まえた持続可能な開発のための教育（ESD）の推進

ESD は、「持続可能な社会の創り手」を育むため、地球規模課題を主体的に捉え、その解決に向けて考え行動する力を育成することで、価値観や行動の変容をもたらす教育であり、すべての SDGs の達成に寄与。ESD の推進拠点のユネスコスクールのネットワークの活用や、優れた ESD の取組に対する補助事業等を通じ、我が国における ESD を一層強力に推進する。

このように SDGs は 2020 年度からの新学習指導要領により、小学校から順次取り入れられていきますが、これまで ESD に取り組んできた方の中には、SDGs という新しい概念が登場してきたことに対し、「ESD に加えて SDGs にも取り組むなんてとてもできない」とか「ESD にかわって SDGs に取り組めばいいのか」と困惑された方も多いかと思います。しかしながら、ESD と SDGs は A と B あるいは A か B という横並びの関係にあるのではなく、『ESD は SDGs の達成を担う人材育成の手法』あるいは『SDGs は ESD が取り組むべきテーマや方向性を明確化した目標』といった相互補完の関係にあるといえます。

本章の最後に、SDGs と ESD の関係について、日本ユネスコ国内委員会教育小委員会がまとめた「持続可能な開発のための教育（ESD）の更なる推進に向けて」の一部を引用・紹介しますので、参考にしてください。

ESD の様々な活動が、国際的に整理された目標である SDGs の各目標にどのように貢献しているのかを考えることは、言い換えれば SDGs によって自分自身の ESD の活動に新たな意義や価値付けを行うことであり、ESD の目標を明確化する方法の一つでもあります。さらに、SDGs は人類共通のグローバル目標であり、それを意識して ESD の活動に取り組むことは、地域に根差した身近な活動が世界につながることであり、地球規模の課題解決に貢献することになるのです。このような自覚と誇りをもって、学校や地域で、SDGs を見据えながら足元の課題解決を大事に、ESD を推進していただくことが重要であると考えます。



第2章 ESD の更なる推進

5 ESD とは？

ESDはEducation for Sustainable Developmentの略で「持続可能な開発のための教育」と訳されています。

今、世界には環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な問題があります。例えば、国際機関である気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、「2019年9月に地球の気候変動は南極の氷を溶かして海面上昇を招き、海の生態系に影響を及ぼす。気温上昇によって永久凍土が溶ければ温室効果ガスが放出される悪循環になる」という衝撃的な特別報告書を発表しています。

このように地球規模の課題が年々深刻化していく厳しい世界に生きている子供たちに対して、知識を一方的に教え込むだけの教育を続けていても課題解決に必要な資質・能力を十分に育成することはできません。子供たちにどのような資質・能力が求められているのか、その育成に、どのような教育の在り方が必要なのかを共に考え、実践を通して共有していく教育改革の営みそのものがESDの原点です。

すなわち、ESDとは、これらの現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。

つまり、ESDは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育です。

ESDの実施には、特に次の二つの観点が必要です。

- 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと
- 他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと
そのため、環境、平和や人権等のESDの対象となる様々な課題への取組をベースにしつつ、環境、経済、社会、文化の各側面から学際的かつ総合的に取り組むことが重要です。

〔出典：日本ユネスコ国内委員会教育小委員会からのメッセージ〕





6 ESD で目指すこと

(1) ESD の目標

- 全ての人が質の高い教育の恩恵を享受すること
- 持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること
- 環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと

(2) 育みたい力

- 持続可能な開発に関する価値観
(人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等)
- 体系的な思考力(問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方)
- 代替案の思考力(批判力)
- データや情報の分析能力
- コミュニケーション能力
- リーダーシップの向上

(3) 学び方・教え方

- 「関心の喚起 → 理解の深化 → 参加する態度や問題解決能力の育成」を通じて「具体的な行動」を促すという一連の流れの中に位置付けること
- 単に知識の伝達にとどまらず、体験、体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチをとること
- 活動の場で学習者の自発的な行動を上手に引き出すこと

〔出典：ESD 国内実施計画〕



7 ESD の歩み

(1) 「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」

〔出典：文部科学省 ESD ポータルサイト〕

1992 年にリオ・デ・ジャネイロで行われた「環境と開発に関する国連会議」（国連地球サミット）では、「持続可能な開発」が中心的な考え方として「環境と開発に関するリオ宣言」や「アジェンダ 21」に具体的に示され、現在の地球環境問題に関わる世界的な取り組みに大きな影響を与えることになりました。その中に、持続可能な開発の実現に向けて教育が果たす役割も記されています。

その後、2002 年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグサミット）」で当時の小泉総理大臣が持続可能な開発における人材育成の重要性を強調し、「持続可能な開発のための教育の 10 年」を提唱しました。これを受け、同年、国連第 57 回総会決議により、2005 年から 2014 年までの 10 年を「国連 ESD の 10 年（DESD）」とし、ユネスコが主導機関に指名されました。

(2) 「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム」

2013 年 11 月、第 37 回ユネスコ総会において、「国連 ESD の 10 年」（2005 ～ 2014 年）の後継プログラムとして「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」（2015 ～ 2019 年）採択され、2014 年第 69 回国連総会で承認されました。

持続可能な開発は政治的な合意、金銭的誘因、又は技術的解決策だけでは達成できません。持続可能な開発のためには我々の思考と行動の変革が必要であり、教育はこの変革を実現する重要な役割を担っています。そのため、様々な行動によって ESD の可能性を最大限に引き出し、万人に対する持続可能な開発の学習の機会を増やすことが必要です。「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム」は、この行動を生み出すための枠組みを示すものです。

(3) GAP 後継の「ESD for 2030」

2019 年 2 月 19 日、第 74 回国連総会本会議において ESD に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）の後継枠組みである「ESD for 2030」が採択されました。「ESD が質の高い教育に関する SDG に必要不可欠な要素であり、その他の全ての SDGs の成功への鍵として、ESD は SDGs の達成の不可欠な実施手段である」と決議に明記されました。

8 ESD の推進体制

(1) ユネスコスクールとは

ユネスコスクールは、1953 年、ASPnet(Associated Schools Project Network ユネスコスクール・プロジェクト・ネットワーク)として、ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践するため、国際理解教育の実験的な試みを比較研究し、その調整をはかる共同体として発足しました。世界 182 か国で 11,500 校以上が ASPnet に加盟して活動しています。日本国内では、2018 年 10 月現在、1,116 校の幼稚園・小学校・中学校・高等学校及び教員養成系大学がこのネットワークに参加しています。日本では、ASPnet への加盟が承認された学校を、ユネスコスクールと呼んでいます。

ユネスコスクールは、そのグローバルなネットワークを活用し、世界中の学校と交流し、生徒間・教師間で情報や体験を分かち合い、地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指しています。

① ユネスコスクールの活動目的

地域や他校との交流、また、海外の学校との国際交流を通して次のような活動を行うことが目的です。

- ユネスコスクール・プロジェクト・ネットワークの活用による世界中の学校との交流を通じ、情報や体験を分かち合うこと
- 地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指すこと

② ユネスコスクール加盟のメリット

日本や世界のいろいろな学校、そしてたくさんの仲間と学ぶ機会が広がります。

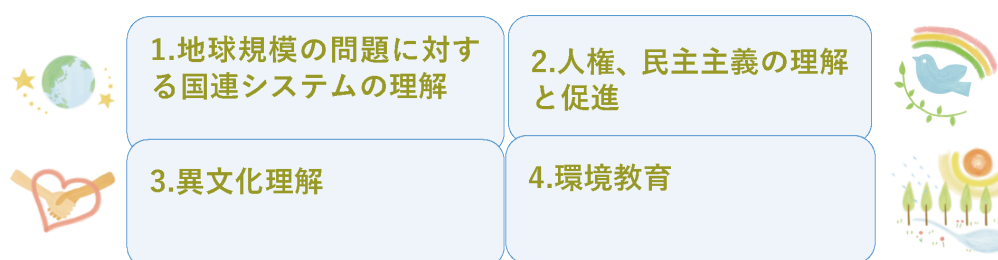
地域や
日本国
内の連
携強化

- ☐ 世界のユネスコスクールの活動情報の提供
- ☐ 世界のユネスコスクールと交流する機会の増加
- ☐ 米国、韓国、中国等海外との教員交流
- ☐ 世界の教育事情、国連機関の活動の把握
- ☐ ESD のための教材、情報の提供
- ☐ ユネスコスクール HP を通じた情報交換
- ☐ ワークショップ、研修会への参加
- ☐ 国内の関係機関との連携強化

世界へ
国際交
流のチ
ャンス

③ 実際にどんな取り組みをしているの？

ユネスコスクールでは、今までの総合的な学習の時間の学びなど地域に根差した活動など持続可能な社会の実現に向けた担い手づくりの取り組みをはじめ、視野を世界に広げて4つの基本分野に取り組んでいます。ユネスコの理念に沿ったものであれば、世界遺産教育など多様なテーマ設定を行い、学びを広げることも可能です。



< "暮らす" の観点から… >

- 自分たちが住む町の文化や人のつながりについての学習
- 自分たちが住む町の防災に関する学習
- 自然がもたらす恵みや災害に関する学習
- エネルギーの大切さや環境問題についての学習

< "食べる" の観点から… >

- 自然の仕組みと食の関係についての学習
- 季節や地域の文化と食べ物の関係についての学習
- 食料の生産、輸送、消費を通じた国内や世界のつながりについての学習
- 食と健康の関係や食の安全に関する学習

< "生きる" の観点から… >

- 身近な生き物の観察や、生き物の分布の地域比較を通じた、生き物と環境のつながりに関する学習
- 私達の生活と生態系のつながりに関する学習

それぞれの学校の地域に根差した活動がESDとなり、持続的な社会の担い手づくりに貢献しています。

(2) ESD コンソーシアム

ESD の推進に向けて、多くの関係者が集まりコンソーシアムを作っています。愛知や信州のように県ごとで組織している場合もあれば、大牟田市のように市や教育委員会が中心となって組織している場合もあります。私たちは北陸の3県でつながっています。少し紹介させてください。

<北陸 ESD 推進コンソーシアム>

福井、石川、富山の北陸3県において持続可能な社会づくりに向けた人材の育成を図るための多くの関係者（マルチステークホルダー）が集うコンソーシアムです。メンバーとしては、大学、教育委員会、学校、市町村の関係部局、NPO / NGO、企業、メディア等が参加しています。北陸3県それぞれにおいてマルチステークホルダーによるユニット（富山ユニット、石川ユニット、福井ユニット）を形成し、それらのユニットの間の緩やかなネットワークを形成しています。

(3) ESD 推進ネットワーク

ESD 推進ネットワークは、持続可能な社会の実現に向け、ESD に関わるマルチステークホルダーが、地域における取り組みを核としつつ、様々なレベルで分野横断的に協働・連携して ESD を推進することを目的としています。

① ESD 活動支援センター

地方 ESD 活動支援センター（地方センター）は平成 29 年度に全国 8 ブロックに開設され、ESD 活動支援センター（全国センター）や地方自治体、地域 ESD 活動推進拠点（地域 ESD 拠点）等との連携のもとに、ESD 推進ネットワークの広域的なハブ機能を果たしています。

（主な機能）

1. ESD 活動を支援する情報共有機能
2. 現場のニーズを反映した ESD 活動の支援機能
3. ESD 活動のネットワーク形成機能
4. 人材育成機能、等



② 地方 ESD 活動支援センター

北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州の全国8か所あり、私たち北陸地方は中部 ESD 活動支援センターがバクアップしています。



③ 地域 ESD 活動推進拠点（地域 ESD 拠点）

学校現場・社会教育の現場では、さまざまな主体が地域や社会の課題解決に関する学びや活動に取り組んでいます。そうした現場の ESD を支援・推進する組織・団体等を、「地域 ESD 活動推進拠点（以下「地域 ESD 拠点」）」といいます。地域 ESD 拠点は、地方センターのパートナーとして、他の地域 ESD 拠点とも連携し、各地域・各分野で取組まれる ESD をさまざまな形で支援することで、「ESD 推進ネットワーク」の中で中核的な役割を果たすことが期待されています。2019 年 11 月現在、102 の組織・団体等が登録しています。

9 留意すべき事項

（１）ホールスクールアプローチ

2016 年 12 月に発表された中央教育審議会の答申に基づいて策定された学習指導要領においても、多様な人々と協働しながら持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められています。

学校全体として ESD に取り組むことを「ホールスクールアプローチ」と呼んでいます。GAP の 5 つの優先行動領域のうち、「機関包括型アプローチ」に位置づけられています。学校内での授業や教育活動にとどまらず、地域とのつながりの中で持続可能な社会への取組を広め、変えていくことが重要です。

（２）学校における ESD の取組

学校全体で ESD の実践や研修の具体化を図るためには、学校経営方針や教育目標に ESD を明確に位置づける必要があります。そのためには、持続可能な社会の構築のために必要な資質・能力と ESD との関係について議論して、学校全体で ESD に取り組むことが重要であり、学校独自のカリキュラムをデザインすることが求められます。

年間授業計画と ESD との関連性を明らかにした ESD カレンダーの作成・活用も ESD 推進の重要な鍵となります。



（３）地域社会の特性に応じた活動

ESD では、地域社会との協働や教科横断的な活動を促進させることで、教員も子供も学ぶ内容や方法が変わることを経験できます。ホールスクールアプローチに取り組むと、教員、子供、保護者、地域住民等、学校関係者が、その学校や地域における持続可能性について協力して考えて取り組むようになります。そのためには学校の関係者と意見交換の場を持ち、共に考え合う姿勢で取り組む必要があります。ESD での着実な実践の継続と改善が、学校文化の形成に資するようになります。

（４）交流の意義と推進

交流はコミュニケーションですから、その意義は通じ合うことにあります。通じ合うことは、互いに尊重し学び合うことにもなります。ESD の交流は、一方的に相手に何かを伝えることなく双方向の関係を築き、ある目的に向けて共に考えて取り組むことです。内外の交流を推進することが大切です。

（５）交流の目的・留意点

『ユネスコスクールガイドライン（2012 年日本ユネスコ国内委員会）』では、ユネスコスクールの活動で大切なこととして次のことを示しています。

- 国内外のユネスコスクール相互のネットワークを介して、互いに交流相手の良さを認め合い、学び合うこと
- 地域の社会教育機関、NPO 等との連携などを通じて、開かれたネットワークを築くように努めること
- 校内外における各種研修の充実・活用を図るなど、ユネスコスクールの活動を通じて広く学校外にも働きかけ、我々人類が持続的に発展するように心がけること
- 学校経営方針等にユネスコスクールの活動に取り組むことを明確に示し、学校全体で組織的かつ継続的にユネスコスクールの活動に取り組みやすくすること

さらに、ESD によって育成したい資質や能力を明確にすることや主体的に問題を見いだして解決することを重視してカリキュラムマネジメントを行うことが求められています。



（６）マルチステークホルダーとの協働

ESD は、その目的を明確にしながら次の各機関等と連携することで、活動や交流が活性化されます。下記に挙げる団体等からは ESD を推進する上で必要な情報や支援を得ることができます。

- 地域のユネスコ協会
- ユネスコスクール
- 日本ユネスコ国内委員会事務局
- ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
- ESD 活動支援センター
- ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）
- 大学
- ESD コンソーシアム
- 企業（社会的責任活動—CSR 活動）

また、８でも述べましたが、ユネスコスクールとの交流は、新しい価値観を共有することにつながります。そのための留意点などの具体的な情報は下記サイトが参考になるでしょう。

- ユネスコスクール公式ウェブサイト <http://www.unesco-school.mext.go.jp/>

10 カリキュラム・マネジメント

新学習指導要領が掲げる「社会に開かれた教育課程」という理念には、「社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、…よりよい社会を創るという目標を持ち」その目標を社会と共有し、「子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力」を育み、「地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携」を図り、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携」させると述べられています。

これは、「ESD の基本的な考え方や SDGs の取り組み目標」（「ESD の基本的な考え方や SDGs の取り組み目標」は、この後「ESD・SDGs」と表記する。）と一致していることが理解できます。各学校で進められる ESD・SDGs と関連する学習は、新学習指導要領が進める「主体的・対話的で深い学び」の扉を開きます。ユネスコスクールであるかいなかに関わらず、各学校が地域の特性や児童生徒の状況なども考慮し、次に示す 6 つの点に留意して、体験的で探究的、協同的な ESD・SDGs の学習を実現するため、教育課程を編成・実施・改善する PDCA サイクルを確立することが重要です。

（１）ESD・SDGs を進める教育課程編成・実施方針の明確化

はじめに、これまでの学校の教育目標や伝統、教育活動の特色、児童生徒の状況、地域の特性とともに、学校運営の課題などを整理することは欠かせません。その過程で、これまでの教育活動においても、ESD・SDGs からみて価値ある実践をしてきたことが浮かび上がります。その上で、持続可能な社会の担い手として児童生徒を育成する学校として、学校教育目標や重点課題、経営方針等において、ESD・SDGs に関する教育目標を明確に示し、教育課程の編成及び実施方針について検討することが大切です。その際、SDGs については、学校の特色や地域の特性に応じて 17 の目標から幾つかに絞り込むことも大切です。

（２）各校の ESD・SDGs で育む資質や能力を明確にした目標と評価観点の設定

教科等横断的な学習では、各学校で育成しようとする ESD・SDGs に関わる資質や能力と関係づけた目標と評価観点を学校、学年ごとに設定することが大切です。その際に、「持続可能な社会づくりの 6 つの構成概念」や「ESD で重視する 7 つの能力・態度」（「持続可能な社会づくりの 6 つの構成概念」「ESD で重視する 7 つの能力・態度」は、平成 24 年 3 月に国立教育政策研究所の最終報告「学校における持続可能な開発のための教育（ESD）に関する研究」で例示された。）と関連付けるなどして、児童生徒にとっても分かり易い設定が望まれます。また、教科学習にあっては、教科の目標が既に ESD・SDGs の視点と関連していることから、教科の目標から読み込める ESD・SDGs 的な意味と意義を理解した上で、目標・評価観点等の分かり易い表記や設定を工夫することが重要です。

(3) 現行カリキュラムの再評価とESD・SDGsカレンダー（ESD・SDGsに関する年間学習計画で教科等横断的な学習や教科や教科発展的な学習などで構成される。）や単元指導計画の作成

これまでESD・SDGsに関連する学習を意図してこなかった学校や教師の授業にあっても、掲げた目標や内容などにはESD・SDGsに合致する価値を持っています。改めて、これまでのカリキュラムが持つ価値や可能性について再評価しておくことが大切です。このことがカリキュラム内容の量的過剰を防ぎ、教育課程の質的改善と意図的な取り組みを促します。

ESD・SDGsを進める教育活動にあっては、各教科等の目標や内容等の相互関係に留意し、学校教育目標を達成することを踏まえて、教科等横断的に内容を組織化したり、教科発展型などで実践したりすることになります。その際、教科等横断的に編成することを目的化して無理をしない為にも、現行の年間指導計画から浮かび上がるESD・SDGsを進める価値ある教育活動からクロスカリキュラムの可能性を探ることが大切です。そして、総合的な学習の時間と教科等を横断して行う学習や、教科発展型で行う学習などを位置づけたESD・SDGsカレンダーを作り、単元指導計画につないでいくことが重要です。

令和元年度 富山市立寒江小学校 第5学年 ESDカレンダー

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
国語			千年の針にいどむ 「コラム」著作権について知ろう	次への一步 活動報告書	明日をつくるわたしたち 「コラム」意見が対立したときは		コラム「グラフや表を縦横に グラフや表を用いて書く」	コラム「文の組み立て 目年のふるさとをまもる 分りやすく伝える」	すいせんします		一まいの写真から 6年生になったら
社会	米づくりのさかんな地域	国土の地形の特色	国土の気候の特色	わたしたちの生活と食料を産 くらしを支える食料生産	水産業のさかんな地域 これからの食料生産とわたしたち			情報化した社会とわたしたちの生活	社会を変える情報 情報を生かすわたしたち		わたしたちの生活と環境 環境を守るわたしたち
算数						比べ方を考えよう			比べ方を考えよう		
理科	天気の変化	植物の発芽と成長			花から実へ 気候と天気の変化						
総合的な学習の時間	自分たちの手で作る・造る・創る～米づくり～			自分たちの手で作る・造る・創る～収穫祭しよう～			自分たちの手で作る・造る・創る～卒業お祝いプロジェクト～				
課題学習	おいしいうるち米ともち米を作ろう			収穫祭をしよう			自分のできることを考えて発表しよう				
情報教育				ネットモラルを身に付けよう							
外国語	L1 Hello! L2 I'm happy.	L3 How many? L4 I like apples.	L5 What do you like? L6 What do you want?	L7 What's this? L8 What's would you like?	L9 Alphabet L11 What do you have on Monday?	L12 She can run fast. He can jump.	L13 Where is the treasure?	L14 Who is your hero?			
音楽		歌いっごう日本の歌									
図工											
家庭		はじめてみよう クッキング					食べて元気に				
体育											
学活		気持ちを考えた言葉 書き			気持ちを考えた行動・言葉 書き					卒業生を送る会の計画を立てよう	
道徳			いっしょに何をしようか ガンジーのいかり	日本のおとこのしぐさ・行動・言葉 海を渡る人	「スミマー作戦」 「ガンジー作戦」	世界の文化遺産	母の仕事	自然を守るエゾリス 救急車	ふるさとへの中学生を送る会 明日へ向かって	ちひろの思い	
行事	なかよし遠足	運動会			相模大会		焼き芋集会 たすきリレー大会	書初大会	感謝の集い		
地域	獅子舞					ふるさとまつり		元旦マラソン			

福祉教育

国際理解教育

人権教育

環境教育

地域の文化財等

寒江小の特色ある取り組み



（４）ESD・SDGsを支える校内外の教育的リソースの活用計画

教育課程の編成と実施にあって、ESDの「think globally, act locally」の精神と「社会に開かれた教育課程」であるという理念を重視し、教育活動が学校内で完結することなく社会と連携・協働することが必要です。実際の教育活動に当たっては、校内外のリソース（人的・物的資源等）の活用に関して、十分な検討が必要です。特に、限りある「時間」と「知識」をマネジメントするにあたって、地域の特性を考慮した外部人材や外部の教育活動の活用や連携が求められます。インターネット環境の進展で県外・国外の学校との交流も盛んになっています。学校の教育的リソースとして学校交流を実現・活用することは、地域の自然や伝統・文化などの価値を再認識する上でも効果的です。また、出会った人たちの生き方から学んだり心の交流が生まれたり、教師や学習者相互の出会い直しができることなどにも留意したいものです。

（５）ESD・SDGsとPDCAサイクル

カリキュラム・マネジメントの中核は、児童生徒の学びの質の向上であり、教師による不断の授業の改善です。ESD・SDGsに取り組むことで、より体験的で探究的、協同的な学習となりアクティブラーニングにつながることを期待されています。そのためにも、教育課程を編成・実施・評価するPDCAサイクルの確立が必須です。特に、ESD・SDGsの授業ではそのプロセスや高次の資質能力の形成が問われていることから、これまで以上に学習評価・評価計画（次節）が重要です。換言すれば、評価計画段階で明確になった「目指す児童生徒の姿」から、逆に学習内容や学習方法など学習計画を準備あるいは再考することにも留意することが必要です。そして、PDCAサイクルによって授業の改善が、不断に行われることが重要です。また、PDCAサイクルの各段階における教育活動状況等が児童生徒や保護者、地域住民と共有されるよう、教育課程が開かれたものとなっている事が重要です。このことは、ESD・SDGsの広がりや深まりにもつながる極めて重要なポイントです。

（６）ESD・SDGsのカリキュラム・マネジメントで重要な校内研修体制

日本が誇る授業研究を中核にした校内研修体制は、ESD・SDGsを進めるカリキュラム・マネジメントにおいて重要な位置を占めます。特に、ESD・SDGsに関わる授業にあっては、答えが一つではない課題も多いことから、授業の在り方にも正解があるわけではありませんし、逆に多様な授業が共存することも必要だとも思われます。しかし、だからこそその不断の授業改善の営みとしての授業研究が重要であり、一つ一つの授業研究の成果と課題を共有しながら教育課程を実践・改善する校内研修体制の確立は重要です。

この様にカリキュラム・マネジメントを充実することは、ESDの基本的な考え方やSDGsの目標達成に向けて、カリキュラムにとどまらず体制や設備、学校文化など学校全体を転換していくホールスクールアプローチ（機関包括型アプローチの学校版の表現で、校内の教育活動にとどまらず学校全体でESDを進める取り



組み。)にもつながると考えられます。改めて、授業づくりの7つのポイントを整理してみたので参考にしてください。

< ESD・SDGs の学びとなる単元計画・授業の構想7観点 >

1. ESD・SDGs として身につける資質や能力、態度が明確である。
2. 各教科等で培う力と ESD・SDGs の学びで培う力を関連づける。
3. 地域の教育資源を（自然、社会、人）を活かして体験的に学んでいる。
4. 国内外の現実的な課題や問題を探究的・協同的に学んでいる。
5. 多様な立場・世代等のステークホルダーから学んでいる。
6. 学習者の個性や主体性が尊重され「自分事として」考え行動している。
7. 学習者自身が評価の主体となるよう評価計画が準備されている。

11 ESD・SDGs と学習評価

持続可能な社会づくりで期待される「自分事として考える」力や「一人も取り残さない」態度などの高次の資質や能力、態度が培われているかを見取ったり、児童生徒が評価する主体であるよう育成したりするためには、基本的な評価の枠組み（文部科学省が通知する「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」）などを理解した上で、より具体的な評価の工夫と、評価に基づく授業改善を進めることが重要です。

（1）評価観点の設定と ESD・SDGs

教科等横断的に行われる学習では、各学校の目標について評価観点を設定する際に、「持続可能な社会づくりの6つの構成概念」や「ESDで重視する7つの能力・態度」を参考にして ESD・SDGs との関連を明確にすることで、より具体的で児童生徒にも分かり易い表記になります。教科の中で教科発展的に行われる学習にあっても、教科の目標における ESD・SDGs との関連を明確にするとともに、どの目標を深めるのか、どのような新たな目標を加えるのかなど、どの様に発展させるのか工夫することが必要であり、その際に評価規準や評価基準の質に注目することが必要です。

金沢市内小学校での目標・評価規準と ESD・SDGs との関連例（第 5 学年）
総合的な学習の時間・社会科等のクロスカリキュラム「金沢の里山と私たちの街」

現行の総合的な学習の時間の目標・評価規準例	学校が想定する育成したい資質・能力・態度	ESD の持続可能な社会づくりの構成概念	ESD で重視する能力・態度との関連	SDGs の目標との関連
・金沢の里山に関心を持ち、市街地にある自分たちの校区とのつながりにきづく。	・課題設定能力	I多様性	⑥つながりを尊重する力	目標 15 陸の豊かさ 
・金沢の里山について調べ、集めた情報を整理分析し、自分たちの校区とのつながりについて、自分なりの考えを持つことができる。	・課題解決能力 ・情報活用能力	II相互性 (III有限性)	①批判的に考える力 ②未来像を予測して計画を立てる力 ③多面的・総合的に考える力 ④コミュニケーションを行う力	目標 12 持続可能な生産と消費 
・金沢の里山と自分たちの校区とのつながりを理解し、尊重するため、身近な人々に働きかけることができる。	・主体的創造的態度	V連携性 (VI責任性)	⑥つながりを尊重する力 ⑤他者と協力する力	目標 11 住み続けられるまちづくり 

（２）単元の評価規準・基準（ルーブリック）の設定と ESD・SDGs

教科等横断的に学習する場合には、目標や学習内容に関連が強いことが前提で横断するのですが、改めて総合的な学習の時間や教科等の時間を貫いて達成したい目標や育成したい資質や能力、態度などについて、ESD・SDGs との関連から明確にしておくことが重要です。このことが教科等を横断する学習の効果を高めます。総合的な学習の時間の学習として評価する際には、目指す学習状況として想定した児童生徒の姿である評価規準・基準（ルーブリック）で評価します。また、クロスする教科等では教科ごとの評価にまとめます。また、教科学習として学習をする際には、教科及の目標や内容等に基づく評価規準・基準の ESD・SDGs との関連を確認しておくことが大切です。教科学習として発展的に時数や内容を付加する場合には、教科の精神を尊重した上で、ESD・SDGs と関連したどのような目標を付加するのか、あるいは教科目標のどれを質的



に向上させるのかを考え、それに応じた評価規準・基準を設定することになります。

（３）多様な評価方法と ESD・SDGs

学びの足跡を累積し振り返るポートフォリオ評価や、一定の学習の中で身に付けた力をパフォーマンスさせ評価するパフォーマンス評価など、多様な評価方法を多様な学習場面で工夫することは、課題解決のプロセスを重視し、合意を形成するための根拠と努力を求める ESD・SDGs の学習にとって重要です。また、課題解決のプロセスにおける「主体的に学習に取り組む態度」を育成する上で、粘り強く学習したり自らの学習を調整しようとしたりする面を見取るためにも重要です。このことが、ESD・SDGs で言うところの「（内外の課題等を）自分事として考える」「誰一人取り残さない」力や感性が育っていることを見取ることにもつながります。課題を発見し正解のない課題解決を経験することも多い ESD・SDGs の授業にあっては、ノートやレポート、発言、作品などを手掛かりに、児童生徒の成長を読み取ることになります。その際には、児童生徒が内心を述べやすい環境も必要です。

（４）自己評価、相互評価、他者評価と ESD・SDGs

自己評価や相互評価、他者評価を重視することは、ESD・SDGs を進める上で重要です。自己評価力を高めるとともに、他者の評価を受けとめる力を育成することは、自分の良さに気づき自己効力感・自己肯定感を向上させるとともに、自分の問題点に気づき、多様な他者を認めることにもつながり大切です。クリティカルに議論する際に、対立する意見や複雑な利害関係などについて、それぞれの具体的な根拠や資料（データ）などに立ち戻った冷静な議論が出来る力や態度は重要であり、自己評価力と他者の評価を受けとめる力などは極めて重要です。また、国内外の交流や地域住民・保護者への報告会、公開授業などの場を設けるなどの工夫によって、教師以外の専門家や多様なステークホルダーなど他者からの評価を得て、新たな自分の発見や課題の発見などが出来ることも大切です。

（５）児童生徒（保護者等）との学習評価の共有と ESD・SDGs

ESD・SDGs に関する学習評価にあっては、学習者が持続可能な社会を担う主体として評価に参画することは大切です。児童生徒が身に付けるべき資質・能力の具体的なイメージを持つことで、主体的に学習に取り組む態度の形成や学習の見通しや調整を促すことが進みます。そのため、児童生徒に学習計画や学習評価について、事前に知らせ共有することは不可欠です。教育の意図と内容等について、発達段階に応じた説明を事前や適切な事中で受けることが原則です。このプロセスにおいて、学習者が持続可能な社会を担うための資質能力等を支えるメタ認知能力を育みます。また、保護者や地域住民と学習評価を共有することも大切であり、ESD・SDGs の理解を広げます。



（６）学習指導や指導計画の評価と改善（授業研究）

児童生徒の学習評価を基盤としながら、教師の協働で行われる授業研究（授業の公開）等によって、1 単位時間の授業の評価だけではなく、指導計画全体についても分析的に評価を行い、これからの学習指導や指導計画の改善に資することが極めて重要です。特に、ESD・SDGs に関連して学習指導として丁寧に評価されるとともに、生徒指導の３視点（「自己決定」の場「共感的な人間関係」の涵養「自己肯定感」の向上を担保した授業が求められている。）から評価することも重要です。生徒指導の３視点である「自己決定」「共感的な人間関係」「自己肯定感」が育まれる学習環境が担保されているかという視点は、ESD・SDGs に関連する学習において学習者の権利保障という大切な評価観点なのです。学習評価を生かして学習指導や指導計画などの改善に取り組む授業研究・校内研修が求められています。

持続可能な社会の担い手として、「自分事として考える」力や「誰一人取り残さない」という精神などが、ESD・SDGs の授業を通して児童生徒の中に育まれているかという本質的な問いに応えるためには、教師や学校が不断に指導計画や学習指導を改善していく営みを持続していくことが重要です。また、この営みこそが、教師や学校を持続可能な社会をつくる担い手として成長させてくれます。



第3章 SDGs・ESD 実践事例

12 勝山市立勝山中部中学校 ― SDGs を切り口にした授業実践 ―

本年度のESDの活動には、ESDとしての本来の目標とともに、授業も含めて学校全体の教育活動をESDの観点で捉えなおすというものがあります。その目標を達成するための一つの授業提案として、中学1年の社会科で、次のような取組を行いました。

(1) 本時の授業名

アフリカ州 [アフリカの課題と展望(本時3/3)]

(2) 本時の目標

- アフリカ州の国々で課題になっていることを、様々な資料から適切に読み取ることができる。
- アフリカ州の国々で最初に解決しなければいけない問題をSDGsの17の目標の中から考え、理由と併せて説明することができる。

(3) 授業の観点

アフリカ州の国々で課題になっていることを多面的にとらえるために、SDGsの17の目標を用いたことは有効であったか。

(4) 主発問

SDGsの17の目標の中からアフリカ州で一番最初に解決すべき問題を考えよう！

(5) 授業の実際

生徒たちは前時までにアフリカの様子について学びが終わり、アフリカについて、一定の情報を持っている状態でした。本時は(4)の主発問を投げかけました。資料として、リーフレットを配布し、一通りSDGsについて話をした後、個人活動⇒グループでの意見交換⇒全体での報告という流れで授業を進めました。



ユニセフ :SDGs 副教材

(6) 授業を終えて

アフリカについて持っている情報からアフリカが抱えている問題をまとめることは容易なことではありませんが、SDGs という指標を示したことにより、生徒は、「考えを持ちやすい」「周囲と比較しやすい」、さらに、「周囲の考えを理解しやすい」など、SDGs を利用する利点をたいへん多く感じました。SDGs17のターゲットを説明している短い言葉は、生徒一人一人が捉えた問題の題名のような効果を発揮していたとも言えます。自分と同じ視点で考えていることと自分と異なった視点で考えていることが明瞭であり、「あの子は何を選んだのだろう」「あのグループはどんな発表をするのだろう」と意欲的に聞く姿勢にもつながっていました。SDGs を指標に、生徒は考えを持ち、自分が持っている情報を根拠に、意見交換をすることができました。今後は、「意見交換」から「対話」へとレベルアップを図り、それぞれの考えをさらに深められるような活動を展開していきたいと考えています。



発表者へ視線を向ける生徒



13 金沢市立兼六小学校 一名古屋市立荒子小学校との交流活動ー

本校は、兼六園や金沢城などの金沢の名所が校区にあり、加賀友禅、和菓子など金沢の伝統文化が根ざしている地域に位置しています。この特色を活かし、本校では金沢の伝統文化に関わる「ひと」「もの」「こと」に触れる体験的な活動や他校との交流を通して、持続可能な社会を創造する学習を全学年で展開しています。ここでは、6学年の実践を中心に紹介します。

交流活動の概要

本校と荒子小学校の交流は、昭和61年から始まりました。当時荒子小学校の4年生の児童が「荒子で生まれた前田利家公が、後に加賀百万石の大名になった」ということに興味を持ち、兼六小学校の統合前の学校である金沢市立味噌蔵町小学校に手紙を出したことをきっかけに今も毎年交流を行っています。

現在は、荒子小学校の6年生が金沢を訪れ、本校の6年生が金沢の魅力を伝える活動をしています。総合的な学習の時間で「荒子小学校の6年生に金沢の魅力を伝えよう」を単元の目標とし、金沢の魅力を調べ、紹介しました。本校は、兼六園や金沢城、ひがし茶屋街や近江町市場など、金沢の名所が近くにあります。それらの名所に実地調査をしたり、金沢の魅力を紹介するボランティアガイドの「まいどさん」から話をうかがったりしながら、金沢の魅力に直に触れることを大切にして学習を進めました。

荒子小学校との交流会では、本校児童による金沢伝統芸能の加賀宝生を発表しました。荒子小学校の児童は、前田利家音頭を披露しました。本校児童は、調べたことから金沢の魅力パンフレットを作成したり、金沢の伝統工芸の水引のしおりを作ったりして荒子小学校の児童にプレゼントしました。金沢の名所ガイドでは、兼六園、金沢城、ひがし茶屋街や近江町市場などを紹介し、それらの名所と前田利家公の業績と関連づけながら紹介しました。荒子小学校の児童は「金沢の歴史的な街並みや伝統文化がすごい」「また金沢に来たい！」など金沢の魅力を感じていました。

その後、地域の方や金沢市役所の方等を招いてこれからの金沢市の課題や未来像について考え、発信することを学習のまとめにしています。



荒子小交流会の様子



金沢の名所ガイドの様子

交流後の児童のふりかえり

- 金沢の名所についてたくさん教えてあげられたし、調べるうちに自分も金沢のことを学ぶことができました。
- この活動を通じて金沢について知識が増え、もっと金沢が好きになりました。
- 兼六園の魅力を伝えられて良かったです。家族にも金沢の魅力を伝えたいです。
- 水引やパンフレットなどすごく喜んでもらえてうれしかったし、よい思い出になりました。
- 前田利家公のおかげで荒子小学校と交流できたので前田利家公に感謝したいです。

14 高岡市立成美小学校 ー共に生きるー

学校は、国道8号線や156号線、県道富山高岡線が縦横に走り、市役所や警察、消防署等の主要施設が建ち並ぶところに位置しています。

ユネスコスクールに認定されて6年目になります。ESDの視点を意識し、身近な事象との関わりやつながりから自分にできることを考え、周りに働きかけて主体的に活動する子供の育成を目指しています。

これまで、地域と連携した防災活動に重点を置き、子供たちが地域の人々と共に「防災マップ」を作成したり「防災会議」を開いたりするなど、活動を通して考え行動する力を身に付けられるように努めてきました。

美しい花壇が自慢の学校で、土作りや肥料・水やり等、地域の方々と共に環境づくりに取り組んでいます。「環境プロジェクト」の活動では、お世話になった地域の方を招く集会を開いて感謝の気持ちを伝えたり、身近な環境である学校の樹木について調べ、全校の子供たちにクイズラリーを設置したりする他、近隣の保育園との交流にも発展しています。

また、支援学校のお友達との交流活動も継続して行っています。互いの学校に出向き、玉入れや七夕短冊作り、歌やゲーム等を共に楽しむことで「なかよしの輪」を広げたり、互いの図画工作科の作品交流を行ったりしています。

高学年の子供たちは、ジュニア福祉活動員として、地域の「いきいきサロン」への参加や高齢者施設での体験活動等を通して、自分たちにできることを考え、主体的に実行しようとする意識や実践力を高めてきました。

今後も、ESDを教科の学習や様々な教育活動と関連付け、地域の「人・こと・もの」との関わりを大切にしながら、自分の生き方や生活を考える学習に努めていきます。



15 金沢市 金沢 SDGs —想像してみよう金沢のミライ IMAGINE KANAZAWA 2030—

金沢市は、金沢青年会議所、国連大学サステナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティングユニットとの3者が中心となって「金沢らしいSDGs」の達成に向けた取組を進めています。まずは、金沢の風土、歴史、文化を踏まえた独自の目標として「金沢 SDGs『5つの方向性』」を導き、これに基づき、学生、NPO、企業、行政等の多様な主体による議論や、幅広い市民からの意見募集を経て、地域全体で取り組むべきアクション（行動）をとりまとめています。また、SDGsについて、気軽にみんなで学び、考えられる場である「SDGs カフェ」も継続的に開催しています。今後は、市民一人ひとりが「金沢 SDGs」を「自分事」として捉えて、積極的に活動を展開していくことが期待されます。

金沢 SDGs「5つの方向性」

1. 自然、歴史、文化に立脚したまちづくりをすすめる “古くて新しくて心地よいまち”
2. 環境への負荷を少なくし資源循環型社会をつくる “もったいないがないまち”
3. 次代を担う子供たちの可能性を引き出す環境をつくる “子供がゆめを描けるまち”
4. 誰もが生涯にわたって学び活躍できる社会風土をつくる “働きがいも、生きがいも得られるまち”
5. 文化や産業に革新的イノベーションが起きる仕組みをつくる “新しいもの、ことを生み出すまち”



金沢SDGs
想像してみよう 金沢のミライ
IMAGINE
KANAZAWA 2030

2030年の金沢を想像すること。
いま何が問題になっているのか。
誰がなぜ困っているのか。

想像力のスイッチをONにすると、たくさんの気づきがあります。
そこから、子供たちに引き継ぐべき
2030年の金沢の姿を描いていきましょう。

金沢SDGsは市民全員が参加者です。
SDGsの基本理念である「誰一人取り残さない」を、
金沢から実践していきましょう。

金沢SDGs「5つの方向性」

金沢市、公益財団法人金沢青年会議所、
国連大学サステナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティングユニットの3者は、
金沢らしいSDGsの取組について議論を重ねてきました。
金沢でSDGsを効果的に達成するために、「金沢の風土、歴史、文化を踏まえること」。
「経済、社会、環境の3つの側面を包括的に捉えること」という視点から5つの方向性を導きました。
今後、さまざまな主体とともに、実現に向けた行動計画を策定します。

1 自然、歴史、文化に立脚したまちづくりをすすめる
古くて新しくて心地よいまち

金沢の風土は、伝統、習俗、町並、市街地から伝承されています。
絶えず変化するまちに古くからの文化が受け継がれ、新しい生活文化が加わり、金沢らしいまちが生まれています。
まちの歴史や文化を大切にしながら、未来へつなげていきます。
こうしたまちの歴史、習俗、市街地の魅力をさらに高め、市民の暮らしを豊かにしていきます。

2 環境への負荷を少なくし資源循環型社会をつくる
“もったいない”がないまち

地球環境は限られています。資源の消費を抑え、自然環境を保全することが必要です。
金沢のまちづくりは、自然環境を大切にしながら、未来へつなげていきます。
まちの歴史や文化を大切にしながら、未来へつなげていきます。
こうしたまちの歴史、習俗、市街地の魅力をさらに高め、市民の暮らしを豊かにしていきます。

3 次代を担う子供たちの可能性を引き出す環境をつくる
子供がゆめを描けるまち

「金沢のまち」は、子育てしやすいまちです。
子育てしやすいまちをつくるには、子育てしやすい環境が必要です。
子育てしやすい環境をつくるには、子育てしやすい環境が必要です。
子育てしやすい環境をつくるには、子育てしやすい環境が必要です。

4 誰もが生涯にわたって学び活躍できる社会風土をつくる
働きがいも、生きがいも得られるまち

人間は学びを喜びます。学びを喜びます。学びを喜びます。
人間は学びを喜びます。学びを喜びます。学びを喜びます。
人間は学びを喜びます。学びを喜びます。学びを喜びます。

5 文化や産業に革新的イノベーションが起きる仕組みをつくる
新しいもの、ことを生み出すまち

文化や産業に革新的イノベーションが起きる仕組みをつくる。
文化や産業に革新的イノベーションが起きる仕組みをつくる。
文化や産業に革新的イノベーションが起きる仕組みをつくる。

「5つの方向性」を紹介するリーフレット

16 富山県南砺市 「一流の田舎」の実現へー

本市は平成 25 年 3 月に自立・循環をテーマに策定した「南砺市エコビレッジ構想」を深化させる取り組みが評価され令和元年 7 月に SDGs 未来都市に選定されました。

そして SDGs の達成は「小規模多機能自治、南砺幸せ未来基金」×「土徳文化、地域包括ケアシステム」×「エコビレッジ構想」＝「世界に誇る一流の田舎」という式で表すことができます。この式は地域循環共生圏の考え方である「自立分散」×「相互連携」×「循環・共生」＝「活力あふれる循環共生圏」をローカライズしたものです。



目指すところは全ての市民が誇りをもって暮らし続けられる「一流の田舎」です。

その「一流の田舎」を実現するために土徳文化（もったいないとおかげさまという言葉が象徴する支え合う暮らし方）が精神面でのベースとなって相互に連携しあい、小規模多機能自治（小学校区単位の住民自治組織。真の地方自治＝行政＋住民自治を達成する仕組み）が地域ごとの課題解決能力を高めていくフィールドを作り、資金面でのサポートを南砺幸せ未来基金（300 名を超える市民で設立したコミュニティファンド）が担うことになります。

そして少子高齢化や福祉介護の充実という地域課題をまちぐるみで支え合うために進めてきた地域包括ケアシステムや南砺市エコビレッジ構想が課題解決への取り組みのヒントを与えていきます。

この考え方で SDGs を進めていけば行政だけの閉じた取り組みにはならず、多様なステークホルダーが関

わっていくことにより、市内に活気が溢れ、全ての市民が誇りを持って暮らし続けられる「一流の田舎」の実現が達成できると考えています。

南砺市 SDGs 未来都市

「南砺版エコビレッジ事業」の更なる深化
～域内外へのブランディング強化と南砺版地域循環共生圏の実装～

Future vision

将来ビジョン 「南砺版エコビレッジ事業」の更なる深化～域内外へのブランディング強化と南砺版地域循環共生圏の実装～



南砺市の土徳文化を次世代に継承する取組みや支え合いによるまちづくりの取組を通して、地域資源の循環や相互補完が可能となる人材育成プログラムや住民参加による自治組織形成を促進するとともに、これらを基金運営等により支えることで、SDGsおよび「南砺版エコビレッジ事業」を更に深化させ「一流の田舎」を実現する。



Goals and targets

2030年のあるべき姿の実現に向けた優先的なゴール、ターゲット



富山県南砺市 世界遺産「合掌造り集落」

17 富山市 - 持続可能な未来を創造する ESD の取組み -

富山市は、人口減少・超高齢化といった課題に対応し、持続可能な都市の実現を目指すために、これまでコンパクトなまちづくりを推進するとともに、小学生から公共交通の大切さを理解し、クルマと公共交通のバランス良い利用の仕方を考える「のりもの語り教育」や、植樹を通して環境意識の醸成を図る「未来に繋ぐ植樹体験」に取り組んでいます。これらの事業の実施には、組織間の風通しを良くするといったガバナンスの強化が欠かせず、本市では組織横断型のタスクフォースが重要な役割を果たしています。



今後、SDGs 未来都市として、コンパクトシティを深化させ、持続可能な未来を創造するためには、ESD の一層の推進を図るとともに、地域課題を自分ごととして受け止め、実践する「SDGs ネイティブ」の育成が求められます。このことから、本市は、北陸電力、北陸銀行、日本海ガス絆ホールディングスとそれぞれ「SDGs の推進に関する包括連携協定」を締結し、「持続可能な未来に向けた多世代の学びの場づくり」など、ESD の推進に向けた連携を強化しています。さらに、企業、金融機関、大学等、多様なステークホルダーと連携して地域課題の解決に取り組むため、行政がハブ＆スポークの機能を持つ「とやま地域循環共生圏づくりプラットフォーム」を設立し、ESD を含めたプロジェクトの社会実装に取り組んでいます。

具体的には、富山第一高校では、金融機関と自治体と連携し、SDGs ゴール1「貧困をなくす」ための金融教育が行われました。また、富山国際大学付属高校では、「ブルーアースプロジェクト」を行う女子大生と生徒が協働して、地球上で起きている環境問題等を考える活動を実践しています。さらに、富山国際大学では、学部間での教員・学生の連携により、小学生向けの「SDGs かるた」を共同制作しました。

このように、SDGs を地域テーマと結びつけ、持続可能な世界に向けた「気づき」を学校現場での実践につなげることで、「ESD のスパイラルアップ効果」が現れています。

18 石川県ユネスコ協会 ―石川県ユネスコ協会青年部の取り組み―

(1) はじめに



石川県ユネスコ協会（および青年部）は、2017 年より BFOK (Building Future Opportunity Kbalromeas) に対して、教育支援を実施しています。

第1次支援とし 2017 年～2022 年の5年間の契約をカウンターパートナー（支援相手）と結んでいます。本稿では、石川県ユネスコ協会が2019年度に実施した国際協力事業を紹介しています。皆様のご支援が本プロジェクトの形となって、現地に届いている様子を是非お伝えできたら幸いです。

(2) 支援先（BFOK）について

BFOK (Building future opportunity Kbalromeas) は、国（政府）による認可を受けた初等教育を中心とした寺子屋（学校）です。シェムリアップ州中心地より、トゥクトゥク（バイクタクシー）にて約20分の場所に位置しています。生徒数はBFOK1（360名）・BFO2（40名）合計400名程度の児童が学んでいます。石川県ユネスコ協会はBFOK2の寺子屋（学校）を2006年に建設しました。主に、英語教育、コンピューター教育、環境教育等を中心に、読み書きや計算なども教えています。一方で、情操教育（音楽やアート）は、指導教員が居ないため、教えることができないという問題点も抱えています。

現地 BFOK Sophean 校長より



みなさん、こんにちは！私の名前は Sophean です。私は BFOK の責任者で校長です。私は BFOK の本拠地 Toek の Kok Dong 村に住んでいます。私は 1983 年にシェムリアップの町から 80 キロメートル離れた田舎の村で生まれましたが、2000 年からこの村で育ちました。多くのカンボジア人と同様に、私は非常に不自由な幼年期を過ごしました。私の家族はとても貧しく、生き残ることさえ難しかったです。学費は優先事項ではなかったので、私の家族は誰も教育を受けることができませんでした。

私の両親は農民で、9 人の子供たちを育てていました。このことは、小学校、中学校、高校、の学費を自分で稼ぐ必要があることを意味していました。勉強を終えて、お金を稼ぐためにシェムリアップでたくさんの仕事を経験しました。寺院の男子僧侶のために薪を調理して集めながら、寺院でしばらく過ごしました。その後、私は、清掃、庭師、ウェイター、クリーニング、英語教師など様々

な仕事を経験しました。お金を節約しながら一生懸命働きました。2種類～3種類の仕事を掛け持ちしていました。やがて自分の暮らす地域に戻り、現地の子供たちが苦勞していることを知っていました。やがて、お金を貯め、学校を開設し、地域の子供たちに教育の機会を提供する活動を始めました。彼ら私とはことなる人生を歩めるように、2014年2月に、私はBFOKを始めました。シェムリアップ州のToekのKok Dong村の子供たちと若者たちに「学び」の機会を提供するために、私たちの学校は現在、世界中のから色々な支援を受けるようになりました。

(3) 支援の概要

皆様から頂いた会費や寄付等は現地に次のように使われております。

① 物資による支援事業

2019年9月 300,000円を支援金として贈呈 石川県ユネスコ協会より

② スタッディツアーによる支援事業

1. 石川県ユネスコ協会スタッディツアー

(目的)

- 石川県ユネスコ協会が支援している団体(BFOK)の現状を知り、理解すること
- 石川県ユネスコ協会青年部の活動の状況を視察すること
- 参加者が現地の状況を把握し、次の支援活動へ生かすこと



2. 石川県ユネスコ協会青年部スタッディツアー

(目的)

- 石川県ユネスコ協会によって建設された、寺子屋訪問を通して、ユネスコの精神を学ぶ
- 海外での実体験を通して、日本では出来ない多くの経験をする
- 学生が「失敗」することを通して、「失敗」から多くのことを学ぶ場を提供すること

(4) SDGs へのとりくみ

当協会では、青少年育成（大学生中心）を行っております。また、各支援していただける企業とパートナーシップの精神で SDGs へ取り組んでいます。

2020 年より、積極的に日本の学校とカンボジアの学校との懸け橋になれるように取り組んでいます。

具体例 1) BFOK (NGO 学校) の児童と日本の公立学校とのインターネットを活用した授業

※現地の子供や先生は英語での交流可能です。

また、インターネットや PC などのインフラ環境も整っています。



具体例 2) スタディツアー参加者による出前授業や間接的な交流

※スタディツアー参加者（大学生）が中心となり、現地の様子をお伝えします。

また、スタディツアー出発時期に合わせて、間接的に手紙等のやり取りができます。

※詳しくは、石川県ユネスコ協会（076-245-6475 担当：野崎）までご相談ください。



参考資料

- 日本ユネスコ国内委員会（文科省）ウェブサイト
<https://www.mext.go.jp/unesco/>
- 「ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引」（改訂版）
https://www.mext.go.jp/unesco/004/_icsFiles/afieldfile/2018/07/05/1405507_01_2.pdf
- ESD 持続可能な開発のための教育 ウェブサイト
<http://www.ESD-jpnatcom.mext.go.jp/index.html>
- 今日よりいいアースへの学び 持続可能な開発のための教育（ESD）とユネスコスクール
<http://www.ESD-jpnatcom.mext.go.jp/about/message.html>
- ACCU 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター ウェブサイト
<http://www.accu.or.jp/jp/accudESD/>
- 我が国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画（ESD 国内実施計画）
<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kokuren/keikaku.pdf>
- 国立教育政策研究所ウェブサイト
<http://www.nier.go.jp>
- ユニセフ「学校のための 持続可能な開発目標ガイド」
<https://www.unicef.or.jp/kodomo/SDGs/>
- 日本ユネスコ協会連盟ウェブサイト
<http://www.unesco.or.jp/>
- 環境省環境教育ウェブサイト
<https://edu.env.go.jp/>
- ユネスコスクール公式ウェブサイト
<http://www.unesco-school.mext.go.jp/>
- 認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育推進会議 (ESD-J)」ウェブサイト
<http://www.ESD-j.org/>
- 北陸 ESD 推進コンソーシアム ウェブサイト（資料検索ガイド）
<http://www.hokuriku-ESD.org/>
- 「教員のための ESD ガイドブック」 北陸 ESD 推進コンソーシアム（2017 年）発刊
- 大学コンソーシアム石川地球環境基金助成金プロジェクト ウェブサイト
<https://www.uconi.jp/newsite/jigyoku/ESD/index.html>



**SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS**

2020 年 3 月発行
石川県ユネスコ協会
北陸 ESD 推進コンソーシアム